

# モンマスの叛乱(1685年)について

— 名誉革命史再検討のために —

浜 林 正 夫

## I

1640年から60年のピューリタン革命が、「大叛乱」、「ピューリタン革命」、「内乱」「イギリス革命」などといういろいろな名でよばれて、いまなおまったく相反した評価をうけることがあるのにくらべて、<sup>(1)</sup>1688年のいわゆる「名誉」革命に対する評価は、ほとんど一定しているように思われる。

オレンジ公ウイリアム三世の皇后メアリと同じ船にのつて、亡命地オランダから帰国した「名誉革命の哲学者」ジョン・ロックは、帰国の翌年に出版した「政府二論」の序文のなかで、「隷属と破滅の危機にあつた祖国を救つた」イギリス国民の勇気と、「わが偉大な救国者国王ウイリアム」とを讃えているが、<sup>(2)</sup>こういうロックの見解が、その後一貫してうけつがれてきている、といつてよいであろう。ロックに対して批判的なのは、ヒュームであるが、そのヒュームも、「自由を尊重することは、賞讃すべき情熱ではあるけれども、しかし、それは既存の政府を尊重することの次にくるものである」といつて、自由のみを強調するウィッグ派をいましめているにもかかわらず、<sup>(3)</sup>だからといつて名誉革命そのものを否定しようというのでは決してなく、むしろ、こういう批判を加えることによつて、名誉革命がうみだした社会体制を擁護しようとしているのであ

(1) 現在支配的なのは、いわゆるウィッグの見解であるが、しかし、たとえば H. Trevor-Roper : *La Révolution anglaise de Cromwell, une nouvelle interpretation (Annales, 10<sup>e</sup> année No. 3, 1955)* のような、トーリの見解もあるし、キリスト教社会主義的な、あるいは、社会民主主義的な見解もあり、もちろんマルクス主義的見解もある。

(2) J. Locke : *Two Treatises of Government, Works, in 10 vols, 1812, vol. V, p.209.*

(3) D. Hume : *The History of England, Ch. LXXI, 1848 ed. vol. VI, p.320.* この脚註でヒュームは、こういう理論の主張者のうちに、ロックをあげている。

(4)  
る。

ヒュームが、名誉革命のイデオロギーを批判しながら、名誉革命がうみだした体制を擁護する、という矛盾した役割を演じなければならなかつたのは、その社会体制のまだ不十分な成熟度をあらわしているためであろうけれども、革命がすでに遠い過去の物語になつてしまうと、歴史家は、ふたたびロックへ逆戻りをして、手放しで革命を讚美しはじめる。その典型的なものは、おそらくマコーリであろう。マコーリの名誉革命観は、ちょうどカーライルのピューリタン革命観がそうであるように、それ以後のウイグ史家のいわば原型となつたものであるが、さしあたり、その二つの大きな特徴を指摘することができるであろう。その一つは、名誉革命においては、ジェームズ二世の専制に反対する広汎な国民的統一戦線が形成され、したがって、ピューリタン革命におけるような「内乱」を生まなかつたのであるが、それは、国王の個人的な性格に起因するものであつた、という考え方である。「1688年の統一は、まるで狂気じみた専制と、国のあらゆる制度を一挙に紛砕しようとした危険とによつて、生みだされたものであり、またそれによつてのみ生みだされえたものである<sup>(5)</sup>」とマコーリは書いているが、この見解は現在でもたとえばトレヴェリアンにおいて見出すことができるであろう。トレヴェリアンによれば、「名誉革命においては、偶然という要素、まったくの幸運、が支配的であつた。われわれの祖先がその権利を回復する機会をえたのは、ジェームズ二世という偶然事によるのみよつたのである。……この奇蹟は、旧敵を全部結合せしめたジェームズ二世の出現によつてもたらされたのである<sup>(6)</sup>」といわれている。このように革命の原因を、ジェームズの個人性という「偶然」に帰する考え方は、かつてシーリーによつてきびしい批判<sup>(7)</sup>を受けたにもかかわらず、なお支配的であるといわなければならない。

(4) ヒュームは、“Essays, moral, political, and literary” (ed. T. H. Green and T. H. Grose, 1875, vol. I, p. 454) で、ステュアート王朝の追放は正当であつたと断じている。(小松茂夫訳、「市民の国について」上巻、昭和27年岩波文庫、142ページ)

(5) Lord Macaulay: The History of England (ed. C. H. Firth, in 6 vols, 1914) vol. II, p. 1038.

(6) G. M. Trevelyan: The English Revolution, 1688—1689 (H. U. L. 1950) pp. 240—241.

(7) シーリーはこう書いている。「われわれは1688年の革命を、ジェームズ二世の\*

マコーリの見解の第二の特徴は、名誉革命における民衆運動を無視することである。「臨時議会 (the Convention) における両党派が、非常に昂奮した討議をしていたまさにそのときに、首府の群衆の指示には、一体となつて抵抗した<sup>(8)</sup>ことほど、われわれの革命において、賞讃と摸倣に値いするものはない」というマコーリの言葉ほど、彼の史観と政治的立場を、みごとにあらわしているものはないであろう。

われわれの名誉革命史再検討は、このようなマコーリの見解の二つの特徴に対する批判から、はじめられなければならないであろう。その第一の点にかんしては、いうまでもなく、名誉革命の原因をジェームズ二世の性格に帰するのではなく、何よりも、ピューリタン革命との統一的関連において、その経済構造を分析することが、問題となるであろう。とりわけ、ここでも農業＝土地問題が分析の中心となるべきであろうが、17世紀後半の土地問題にかんする研究は同じ世紀の前半にくらべて、いちじるしく立ちおくらせているので、ヨーマン層の衰微という一般的な傾向が指摘されている以外には、なお未開拓であるといわざるをえない。ただ最近、「経済史評論」に発表されたV・M・ラヴロフスキーの論文が、この問題に対する一つの分析をこころみているが、しかしこの論文も、結論的なものをしてしているというよりは、むしろ問題を提起しているもの、というべきであろう。<sup>(9)</sup> そのほかに、H・J・ハバカクや、J・サースクの研究なども、<sup>(10)</sup> いずれも示唆的ではあるが、しかし、あくまで示唆にとどまるものといわなければならない。本稿ではこの問題にこれ以上立ちいることは不

\*頑迷固陋に反対する護憲抵抗運動として、あまりにも簡単に考えすぎるくせがある」  
「革命は1688年のウィリアムの遠征ではじまつたのではなく、1670年のドーヴァの密約ではじまつた……」(I. R. Seeley: *The Growth of British Policy*, 2 vols (1895), vol. II, pp. 171, 306. ただしシーリーのこの批判は、国際関係という視角からのものである。

(8) Lord Macaulay: *op. cit.*, vol. III, p. 1289.

(9) V. M. Lavrovsky: "Expropriation of the English Peasantry in the Eighteenth Century" (*The Economic History Review*, 2nd ser., vol. IX, no. 2, 1956), pp. 271-282.

(10) H. J. Habakkuk: "English Landownership, 1680-1740" (*Ibid.*, vol. X, no. 1, 1940), J. Thirsk: "The Sales of Royalist Land during the Interregnum" (*Ibid.*, 2nd ser., vol. V, no. 2, 1952), ditto: "The Restoration Land Settlement" (*The Journal of Modern History*, vol. XXVI, no. 4, 1954).

可能である。

第二の、名誉革命における民衆の役割についても、分析を1688年にかぎることなく、ピューリタン革命からの連続においてとらえる必要があるであろう。1640年代のロンドン民衆の運動や、レヴェラーズ、ディッガースの運動、1650年代におけるクエーカーその他のセクトの動きなどの延長の上に、1660年代のトマス・ヴェンナーの一揆や、1670年のヨーク公排斥運動、法王派の陰謀、1680年代のライ・ハウス陰謀などの諸事件が分析されるべきであり、そしてこれらの一連の運動は、トレヴェリアンが、「イングランドにおける最後の『農民一揆』<sup>(11)</sup>」とよんだところの、1685年のモンマスの叛乱において、最高頂に達する。モートンの表現によれば、「モンマスの敗北によつて利益をえたのは、結局のところ政府ではなくてウィッグであつた。この敗北が左翼をおしつぶしたので……のちに『名誉ある』と讃えられるにいたつた革命を、安全に上演することが可能になつたのである<sup>(12)</sup>」といわれているが、名誉革命はこういう民衆の運動との関連においてとらえられなければならないのである。これらの一連の運動についての研究も、まだきわめて不十分であるが、本稿では、さしあたり、モンマスの叛乱だけに限定して、最近出版された二つの研究書を中心に、その紹介と若干の問題点の指摘をこころみたいと思う。

## II

モンマスの叛乱にかんする個別研究はあまり多くないのであるが、<sup>(1)</sup>1950年代になつて、二つの新しい研究があらわれた。一つはW. R. Emerson : Monmouth's Rebellion (Yale, 1951) であり、もう一つは I. Morley : A Thousand Lives (London, 1954) である。まずエマーソンのものから検討してみよう。

(11) G. M. Trevelyan : op. cit., p. 49.

(12) A. L. Morton : A People's History of England (1948), p. 288.

(1) 私が知りえたところでは、いずれも未見であるが、次のようなものがある。  
Forde, Lord Grey of Wark : The Secret History of the Rye House Plot, and of Monmouth Rebellion (London, 1754), Richard Locke ; The Western Rebellion (1782), George Roberts : The Life, Progress and Rebellion of James, Duke of Monmouth (2 vols, London, 1844), Allen Fea ; King Monmouth (London, 1902), J. G. Muddiman ; The Bloody Assizes (London, 1929), Elizabeth D'Oyeley ; James Duke of Monmouth (London, 1938).

この著者エマースンは、エール大学の1948年度の学生で、この書物は学生懸賞論文に当選したものが大学出版所から公刊されたものである。この書物のなかで著者は、モンマスの叛乱にかんする体系的な敘述をこころみようとしたのではなく、これまでの研究ですでに明らかになっている点は簡略にすまして、いくつかの問題点のみを詳論するというやり方をとっている。どういう点が、それでは問題であるのか、以下、著者がとりあげている順序でたどってみよう。

第一に、これまでの歴史家は、このモンマスの叛乱を、まったく無暴な、まったく成功の見込みのない暴挙とみていた。エマースンはこれに対して、この叛乱には成功の可能性がかなりあつたし、少くとも叛乱が長期化すれば、オレンジ公ウイリアムやルイ14世の介入が必然化し、イギリスの歴史は大きく変わったであろう、というのである。その理由は、ロンドンの状態が不穏であり、ジェームズ二世の即位がひろく不安と疑いの念をもつて迎えられたために、西部に上陸した叛乱軍に対して急速に正規軍をむけえなかつたこと、——事実、フェヴァン伯のひきいる正規軍がロンドンを出発したのは、モンマスがライムに上陸してから10日もたつた6月20日のことであり、しかもその兵力は、モンマス軍が8,000の歩兵と1,000の騎兵をもつたのに対して、ブリストル入城時にはわずか3大隊の歩兵と200の騎兵のみであり、セッジムアアの戦闘の時にようやく2,000の歩兵と700の騎兵をそろえたにすぎない。これに対してモンマスは、上陸当時わずかに、1,500の歩兵と4門の小さな大砲と200樽の火薬と数百の胸当てしかもつていながつたのに、西部民衆の圧倒的な支持をうけて、数日のうちに上記の数にまでふくれ上つたのである。<sup>(2)</sup> こういう軍事的な理由に加えて、国内国外の政治情勢があつた。70年代のヨーク公排斥運動は革命前夜を思わせるほどの高まりをみせ、国際的には、オレンジ公を中心とする反フランス統一戦線が形成されつつあつた。こういう一般情勢についてのエマースンの分析は、簡略にすぎるうらみはあるが、イギリス国内の問題が国際的

(2) モンマスの兵力については、史家の見解は一致していない。たとえば G. N. Clark ; *The Later Stuart, 1660—1714* (1949 ed.) pp. 113—114 は、モンマスの兵力を4,000の歩兵と500の騎兵程度とし、「軍事的な危険——(モンマス側からいえば成功の可能性——引用者)——はほとんどなかつた」といつている。

な規模において大きな重要性をもちえたであろうことが、正当にも指摘されている。ジェームズとしては、叛乱が長期化すれば、オレンジ公またはルイの介入をうけ、いずれにしろその王位を脅かされる危険にさらされていたのである。

それではこの叛乱は何故失敗に終つたのか。エマースンはこの失敗の理由を三つの主要な項目に要約している。第一に、物質的な裏づけを欠いていたこと、(モンマスは上陸当時 100 ポンドしかもつておらず、ロンドンで資金募集を担当していたワイルドマンからはまったく音沙汰がなかつた)。第二に、この叛乱への参加者のなかで、その政策や目標に対立があつたこと、そして第三に、指導者としてのモンマスの無能力、とくに決断力の欠如、がそれである。<sup>(3)</sup>この第三の点については、エマースンは第4章で戦闘の経過をおいながら詳論しているが、ここでは省略する。問題は第二の点にあるように思われる。というのは、第一、第三の理由は、すでにこれまで多くの研究者によつて指摘されてきたことであり、かつ、第二の理由と無関係ではないからである。

ところで、この叛乱に参加した人々のなかで、どういう対立があつたのか、またそれは何故か、という問題を考えようとすれば、当然にまず問題になるのはどういう人々が、この叛乱に参加していたのか、ということであろう。そしてこの点については、エマースンの分析はきわめて不十分であり、これまでの研究<sup>(4)</sup>を前進させているとはいえないのであるが、しかし叛乱の指導者のなかの対立についてはかなり詳しくのべている。まずはじめに、モンマスより三週間先にスコットランドへ侵入したアーガイル伯と、モンマスとの間に協力関係が

(3) W. R. Emerson : Monmouth's Rebellion, p. 21.

(4) 大ざっぱな方であるが、この叛乱を支持したのが「下層階級」であつたことについては、史家の見解は一致している。しかしトレヴェリアンがこの叛乱におけるヨーマン層の役割を高く評価している(“England under the Stuarts”, 1949 ed. p. 358)のに対して、クラークはむしろ職人層——とくに織布工とメンディップの鋳夫たち——の役割を強調している。たとえば、叛乱当時、トーントンの保安官の調べでは、275人が家を離れているが、そのうちと少なくとも120人は織物業の職人であるという。(op. cit., pp. 114—115). そしてトレヴェリアンがこの叙乱におけるイデオロギー的要素を強調するのに対し、クラークは、「賃労働者のなかの貧困と失業」という社会的要素を重視している。

うちたてられなかつたことが、指摘されなければならないし、<sup>(5)</sup>次にモンマスの叛乱それ自体において、モンマスのはたした役割も大いに疑問とされなければならない。エマースンがとくに新しい史料をあげて強調していることは、モンマスが叛乱の2ヶ月ぐらい前まで、きわめて引込み思案で、ある友人にあてて「私は引退生活の方が好きで、もう一騒ぎしようという気はない」と書きお<sup>(6)</sup>つてのことである。つまりモンマスは自らこの叛乱を計畫し組織していつたのではなく、オランダに集結していたイギリスの亡命者たちのプランにのせられて行動したのにすぎないのであり、かつ、この亡命者たちのなかでも決して統一性が保たれていたわけではないのである。当時の亡命者中には、あのロックもいたはずであるが、しかしこの叛乱の中心人物は、レヴェラーズの残党ジョン・ワイルドマンや、職業的陰謀家といわれるロバート・ファーガスンやパトリック・ヒュームなどであつた。<sup>(7)</sup>しかも彼らは、モンマスの指導力や組織力を信頼してこれがかつぎだしたのではなく、むしろこれを軽蔑し、あるいはその意図を疑い、少くとも蜂起の指導者として適當とは考えなかつたのである。彼らはただ、下層階級の間におけるモンマスの人気、チャールズの庶子であるというそのネーム・ヴァリューを、利用しようとしたにすぎない。<sup>(8)</sup>ワイルドマンがモンマスの侵入を援助したのは、その蜂起がもたらす混乱を利用し、あわよくばロンドンで共和派の蜂起をはかろうとしたためであつた。<sup>(9)</sup>ワイルド

(5) アーガイルは高地地方の領主として、低地地方およびイングランドのジェントリ層とは、やや異なつた立場にたつ。彼にとってはステュアート絶対王政との対決は、スコットランドの伝統的なカーク (Kirk) の自治の保持という目的からのものであつた (cf. W. R. Emerson, op. cit., p. 8).

(6) W. R. Emerson; op. cit., p. 12, App. I.

(7) これらについては、M. Ashley: John Wildman, Plotter and Postmaster (New Haven, 1947), J. Ferguson; Robert Ferguson, the Plotter (Edinburgh, 1887) などの研究書がある。

(8) W. R. Emerson; op. cit., pp. 10—11.

(9) *ibid.*, pp. 14, 25—26. この点にかんしてアシュリの見解は大分異なつている。ワイルドマンがモンマス個人を尊敬せず、かつ、かりに成功してもジェームズをモンマスに変えるだけで、彼の宿願である共和制樹立の見込みがないと考えていたという点については、アシュリはエマースンと同じ見解であるが、しかし、アシュリによれば、そのためにワイルドマンはモンマスの叙乱を思いとどまらせようとあらゆる努力をし、しかしそれにもかかわらずモンマスが上陸してきたときには、生命の危険をおかしてこれを援助しようとしたが、弾圧がきびしく思うように援助しえなかつた、とされている (M. Ashley: op. cit., pp. 253—260).

マンにこういう意図が意識的にあつたかどうかについては、エマーソンの主張に史料的な裏づけが十分でなく、決定的なことはいえないように思われるが、とにかくモンマス支持者に統一性が欠けていたことは事実である。それがどういう原因にもとづくかは、もつと詳細な分析が必要であろうが、モンマスというあまり有能でない、しかしポピュラーな指導者が必要とされたこと自体が、そういう統一性の欠如をしめしているというべきであろう。

エマーソンが第一章と第二章で論じているのは、以上のようなことであるが、第三章ではこの叛乱とオレンジ公との関係が問題にされている。そしてここでエマーソンは「ウィッグ史家」に対する批判をこころみるのである。ウィッグ史家たち——エマーソンがとりあげているのはハラムとマコーリであるが——は、オレンジ公がこの叛乱には無関係であつたこと、あるいはさらに、この叛乱を阻止しようという少くとも意図はあつたこと、を強調する。しかしオレンジ公が、イギリス政府からのたびたびの要請にもかかわらず、オランダ国内の亡命者たちの活動を放任し、あるいは、公然かつ悠長なモンマスの出航を阻止せず、おそらくモンマスがその出航直前に「オレンジ公と長い深刻な会談」<sup>(10)</sup>をもつたと推定されることなどは、オレンジ公が少くともモンマスの計畫を黙認し、あるいは積極的に支持さえしたことの、証拠であると考えられる。ところがモンマスがイギリスへ上陸すると、オレンジ公はジェームズ二世に対して軍事的援助を申出ているのであつて、ジェームズはこの援助を拒否してはいるけれども、これはあきらかにオレンジ公の裏切り行為といわなければならない。ウィッグ史家にとっては、こういうオレンジ公の裏切りを認めることは耐えがたいことであつたのであろう。しかしエマーソンは、このオレンジ公の裏切りこそ、解明されなければならないのであり、かつ解明しようと主張する。エマーソンはこう書いている。「彼（オレンジ公）はこの冒険から決して何もかも失うことはなかつた。もし叛乱の結果モンマスが破滅せしめられるなら、王位を狙う人気者がいなくなつて、王位への自分の資格がはつきりしてくるであらう。また、もし万一ジェームズが敗北しても、モンマスは……王位をとることができないであらう。もしモンマスの侵入がある程度成功すれば、ジェーム

(10) W. R. Emerson : op. cit., p. 44.

ズはオレンジ公に援助をもとめるであろうし、一旦軍をひきいてイギリスへ渡れば、追いだされることはあるまい、というのが、オレンジ公の考えでは重要な点であつた<sup>(11)</sup>。このようにエマースンは、モンマスの叛乱を名誉革命との関連においてとらえるのである。それは消極的な意味においてであるが、しかしおそらくもつとも重要な、名誉革命の原因であつたのであり、このようにモンマスの叛乱をとらえることによつて、エマースンの考え方は、マルクス主義史家モートンの、先に引用した見解にいちじるしく近づくことになる。もつともエマースンはこういう見解を提起するにあつて、モートンをよりどころにしているのではなく、ウインストン・チャーチルに多くを負っているようであり、<sup>(12)</sup>エマースンの政治的な立場は、モートンとは正反対である。つまりモートンがモンマスの叛乱の消極的な重要性を強調したのは、それをおしつぶして「上演」された名誉革命の非民主性を指摘するためにほかならなかつたのであるが、エマースンの場合には、モンマスの叛乱の重要性は、彼自身にとつても消極的な意味しかもちえないのである。すなわち、上流階級がモンマスのよびかけに応ぜず、その蜂起が失敗に終つたことは、まことに幸運であり、この失敗によつて、「ウィリアム三世によるイギリスの解放」が容易になつた<sup>(13)</sup>、とエマースンは評価する。誰がどういふようにイギリスを「解放」したのか、はここでは問題にされない。何故ならエマースンも、ヒュームやマコーリと同じように、名誉革命がうみだした社会体制の無条件肯定の上にたつていからである。ただエマースンは、民衆の役割を簡単に無視しえない。モンマスの叛乱はたんなる暴挙ではなく、十分に成功の可能性をもつていたのであり、そしてまさにその故に、それをつぶすためには、オレンジ公の裏切りも容認されねばならないのであろう。

### III

もう一つの I. モーリの書物は、エマースンとは正反対の立場にたち、いく

(11) *ibid.*, pp. 38—39.

(12) たとえば *ibid.*, p. 80, no.113. ここで引用されているのは, Winston S. Churchill: *Marlborough, His Life and Times* (6 vols., New York, 1946). vol. I, pp. 207—208 である。

(13) *ibid.*, p. 67.

つかの点で異なつた見解をとりながら、またいくつかの点では見解の一致をみせているように思われる。彼女の書物は、その副題——「1660年から1685年にいたるイギリス革命運動の物語」——がしめしているように、ピューリタン革命以後の民衆運動を一貫してとりあげ、モンマスの叛乱を、「イギリス市民革命の最後の戦闘<sup>(1)</sup>」といい、また「まったく異なつた情勢のもとで、43年前にエッジヒルではじまつた長い戦いは、1685年7月6日の朝、セッジムーアで終りをつげた。“Old Cause”は失われ、レヴェラーの深緑色は、サマセットシヤの溝のなかに永久に埋れてしまつた<sup>(2)</sup>」として、これをピューリタン革命の、とくにそのレヴェラー運動の、延長としてとらえようとするのである。そこで分析は当然に1660年の王政復古からはじめられなければならない。

王政復古は決して革命の否定ではなく、むしろその確認である、ということは、多くの歴史家によつて指摘されてきたところであるが、しかしそこにまったく反動性がなかつたともいいえないであろう。後期ステュアート王朝はそういう複雑な性格をもつと考えられるが、モーリによれば、その性格は次のように表現される。復古王朝は、「過去への悔い改めのしるし」——つまり革命の否定——ではなく、「未来へのオプティミズムのしるしであり、この未来はまだはつきりした形をとつていないが、過去とは違うものになることは決つていた<sup>(3)</sup>」、すなわち、ブルジョア階級が復古王朝を支えているのである。しかし「市民革命は完全に終つたのではないし、国王の復位は正確には平和をもたらさず、いろいろなものにかくれて、旧い対立がまだくすぶつていた<sup>(4)</sup>」し、それは「封建領主が、少数ではあるが新興の中産階級にたすけられて、その伝統的な支配を……維持しようとする」絶対主義の延長でもある。そこでの基本的な階級対立はやはり、封建領主とブルジョア的中産階級なのである。このことを経済構造についてみれば、一方において復古王朝は革命期におけるブルジョア的発展を逆戻りさせようとし、——たとえば Settlement Act による労働移住の禁止、ために「農民はなお土地にしばりつけられた農奴であつた」——他方、

(1) I. Morley ; A Thousand Lives, p. 208.

(2) *ibid.*, p. 220.

(3) *ibid.*, p. 13.

(4) *ibid.*, p. 73.

封建負担を廃したジェントリ層は、農業改良や企業投資へ積極的にすすんで、ますますブルジョア化していく。<sup>(5)</sup>これに対応して、民衆の要求の基盤も、かつての独立小生産者的なもの、将来の労働者的なものとの、中間に位するという、不安定かつきわめて困難なものになるのである。民衆の戦いは1660年代のロンドンの蜂起いらい一貫しているのであるが、こういう複雑な基盤の上にたたざるをえなかつたため、大きく組織化されていかなかつた。モンマスの叛乱はこういう背景のもとにとらえられなければならないであろう。

モーリが問題としている一つの点は、こういう民衆運動が、ブルジョア的抵抗とどう関連しているのか、ということであり、この問題を、ブルジョア的抵抗の代表者シャフツベリと、モンマスとの関係においてみようとする。しかしこの点では、著者は、すでにかつてモートンが、非常に簡潔に描いたところと<sup>(7)</sup>根本的に一致した立場をとっており、ただシャフツベリについてかなり多くのページをさいているが、このシャフツベリ解釈はもう少し検討を必要とするように思われる。シャフツベリらの“Excluders”が、クロムウェルのように、勝利をえたのちに左翼勢力をおしつぶそうとしていた、<sup>(8)</sup>とみることは正しいのであるが、しかしこれらの勢力をクロムウェル＝独立派のたんなる延長とみることは<sup>(9)</sup>問題があるのではなからうか。

次にモンマスの叛乱そのものについてみてみよう。モーリは、モンマスの叛乱がオレンジ公に利用されたとみる点では、エマースンと完全に一致しているが——ただしもちろん政治的評価は正反対——、叛乱の成功可能性についてはやや異なつた見方をしている。といつてもモーリは、ふつういわれているように、この叛乱を「暴挙」とみているわけではない。そういう見解を彼女ははつきりと批判する。それはいわば結果論的な評価であつて、その当時としては、このプランは「健全で、決定的で、実際の」であるようにみえた。この叛乱は<sup>(10)</sup>軍事的にも成功しそうであつたのであるが、しかし直接的にはウィッグ上層部

(5) *ibid.*, p. 17.

(6) *ibid.*, pp. 40—43, 86—87.

(7) A. L. Morton : *op. cit.*, p. 282, et seq.

(8) I. Morley : *op. cit.*, p. 124.

(9) *ibid.*, p. 37.

(10) モンマスがトートンを出発した6月21日には、その軍隊は「約7000人の勢力で\*

——オレンジ公をふくめて——の裏切りによつて、さらに客観的には、歴史の歩みに反するその蜂起のナチブル性によつて、叛乱は失敗に終つたのである。<sup>(11)</sup>このようにモーリが、モンマス個人の無能力よりも、歴史の大きな流れのなかでのこの叛乱の位置づけから、その失敗を説明しようとしているのはもちろんきわめて正しいのであるが、しかしそのために彼女は、モンマスの能力や叛乱軍の内部統一を過大評価するという、ふつうの歴史家と逆の誤りにおちいつているように思われる。もつとも、モンマスとワイルドマンらの共和派との意見の喰い違いは指摘されているが、この点はもつとつこまなければならないのではなからうか。たとえば、これら共和派の立場は、「イデオロギー的には(モンマスらの)立憲君主制よりも左であるが」、「多くの富裕な人々をふくんではいたけれども、大衆をとらええず」、むしろオレンジ派に近い、<sup>(12)</sup>という矛盾はどう解明さるべきなのであろうか。むしろこの問題は逆に、大衆の支持をえているモンマス派が、イデオロギー的に立憲君主制をかかげているという矛盾、そしてさらに、モンマスが宣言を発して自ら国王を名のつた矛盾なのではなからうか。モンマスが上陸直後に発表した綱領は、エマーソンによつて高い評価を与えられており、立憲君主制という目標をかかげ、あるいはモンマス自身が国王を宣したのは、ジェントリ層の支持をえて、この叛乱の成功を容易ならしめようとしたためだ、<sup>(13)</sup>といわれているが、しかし、レヴェラーズの「人民協定」の伝統をつぐといわれるこの綱領には、<sup>(14)</sup>レヴェラーズの基本的な主張である普

---

\*ほとんど職業軍のような外観をしめしていた」(ibid., p. 203)。「それは決して『やけくその企て』であつたのではなく、民衆の運動の強さは抗しがたく、すべてのものにうちかつていくように思われた」(ibid., p. 195)。

(11) ibid., p. 172.

(12) ibid., p. 178.

(13) ibid., pp. 181, 201.

(14) ibid., pp. 180—181. この綱領は前文で、社会契約説とイギリスの伝統とから、立憲君主制を正当化し、チャールズ、ジェームズの罪状をならべたのち、次のような7項目の要求をかかげている。(1)制限君主制の確立、(2)信仰の自由(ただしカソリックは公職禁止)、(3)議会は毎年ひらかれ、かつ議会自身の同意なしには休会、解散せしめえない、(4)裁判官任命は議会の承認を必要とする、(5)没収された特権の回復、(6)常備軍には議会の承認必要、(7)モンマスはチャールズ二世の嫡出子であるが、必ずしも王位を望むものでなく、この決定は議会へゆだねる。この綱領は1680年代はじめにウィッグの非合法組織が採用した綱領をつぐものである。cf. ibid., pp. 138—139. なおこの綱領は、マコーリによれば、悪意と中傷にみちた「最下層\*

選要求や、一院制の主張がなく、いわば完全な議会主義になつてゐることは、大衆的イデオロギーとはどうしてもいいえないであろう。こういう矛盾は、比較的上層部のインテリ階級に古い共和主義のイデオロギーが、イデオロギーだけではあるが、のこつていて、大衆はイデオロギー的にも無方向化しつつあることをしめしている、と解すべきではなからうか。この点の解明は、やはりまずモンマスの叛乱の社会経済的な背景の分析からはじめられなければなるまい。

モーリは、モンマスのもとへ馳けつけた西部の大衆には、二つの種類の人々があつたとみている。つまり、小商人、ヨーマン階級と、農業労働者、織布工、鋤夫、採石夫などの賃労働者階級とであるが、この二つの階級の利害が一致したことは、この時期のこの地方の社会経済的発展の必然的な帰結であつたとい<sup>(15)</sup>う。彼らが「プロテスタンティズムのために」という旗印のもとに一致団結したこと、このプロテスタンティズムというのはたんなる宗教的なスローガンではなく、社会的な意味あいをもつていたこと、は事実であるが、しかしこういう二階級に支えられていたこと自体に、この叛乱の困難さがあつたのではあるまいか。終章で彼女は、名誉革命以後においては、中小生産者層の没落のために、もはやこういう民衆運動は不可能になつた、といい、したがつて民衆は名誉革命を消極的に是認し、フューガスのような職業的革命家は、まったく逆の立場のジャコバイトになつてしまう、ということを描き出しているのであるが、こういう民衆運動の解体の傾向は、モンマスの叛乱自体のなかでも分析されるべきであろう。

最後にモーリは、もう一つの点について、ウィグ史家を批判している。それは叛乱の失敗後おこなわれた弾圧、いわゆる「血の巡回裁判」(the Bloody Assize)にかんしてである。マコーリはこの弾圧の苛酷さを認めるが、これをカーク大佐やジュフリイズの個人的な性格に帰し、かつこの叛乱は、少数の「首謀者が……その権力と技術によつて、大衆を誤りに導いたものであり、彼らこ

\*階級のひぼう文」のようなものだといわれており、フューガスの手に成るものだろうとされている。Macaulay: op. cit., vol. II, p. 564. cf. G. Burnet: History of His Own Times (abridged ed. in Everyman's Library) p. 231.

(15) I. Morley: op. cit., p. 189.

そ厳罰をうけるべきであつた<sup>(16)</sup>」という。モーリはこれに対して、第一にこの叛乱を少数者の陰謀とみることに反対し、第二にこの弾圧の苛酷さを当事者の個人性に帰することに反対する。もし首謀者というものを求めるとすれば、大衆こそがそうなのであり、もし首謀者を厳罰に処すべきであるなら、大衆に対する弾圧は正当化される。そして事實はまさに、カークやジュフリイズだけでなく、ウィッグ派全体の支持と同意によつて、この弾圧がなされたのであつた、と彼女は主張する。ジュフリイズは名誉革命後亡命をくわだてて失敗し、捕えられて獄死するのであるが、このことはウィッグ派が彼の「血の裁判」にそもそも反対していたことをしめすとは限らないであろう。なおこの弾圧の犠牲者数についてもいろいろな見解があるようであるが、モーリによれば、セッジムアの戦闘後、一週間にわたつてカークの部隊が虐殺したもの 1,000 名、「血の裁判」で死刑になつたもの 331 名、島流し 850 名、罰金・投獄など 408 名、とされている<sup>(17)</sup>。

1696年、これらの「血の裁判」の犠牲者の最後の言葉をあつめた「新しい殉教史、あるいは血の巡回裁判」(A New Martyrology or the Bloody Assize) が出版された。そのなかでエブラハム・アンズリという一士官はこういつたと伝えられている。「もし私が千回生れ変つたら、千回の生命をすべて同じ目的にささげよう。神は、(神のみが知り給う理由によつて)、われわれの企てを阻止し給うたけれども、やがては、われわれの知りえない、また考えつかぬ方法で、その民を救い給うであろう。」モーリのこの書物の標題は、この士官の言葉からとつたものである<sup>(18)</sup>。

#### IV

以上の簡単な紹介はもちろん問題点の指摘にとどまるものであつて、決してそれ以上のものではないが、さしあたつて、以上の紹介からあきらかになつた

(16) Lord Macaulay : op. cit., vol. II, p. 646. この言葉は I. Morley : op. cit., p. 221 に引用されて批判されている。

(17) I. Morley : op. cit., p. 224 マコーリの数字もほぼこれにひとしいが、カークによる殺害者数についてはいちじるしい喰い違いがある。Lord Macaulay : op. cit., vol. II, pp. 626, 634.

(18) I. Morley : op. cit., p. 226.

問題点を整理してみると、次のようなものになるであろう。

第一に必要なことは、後期ステュアート時代の経済構造の解明ということである。現在ふつうによりどころとされるのは、グレゴリ・キングが17世紀末に作成した統計と、マコーリの「イギリス史」第3章の敘述なのであるが、こういうもので不十分であることは、いまさらいうまでもないことである。そしてまた、このような経済構造の分析がなければ、名誉革命の位置づけも、モンマスの叛乱の分析も、不可能であることもいうまでもない。エーマンの研究はもちろんのこと、モーリのそれもこの点ではなおきわめて不十分であるといわなければならないであろう。

第二に、ウィッグ諸派の立場が、こういう経済構造との関連においてあきらかにされる必要があるし、とりわけそれが、ピューリタン革命における諸派との関連においてとらえられなければならない。とくに、ピューリタン革命のときにふつう国王派の拠点といわれている西部地方が、モンマスの叛乱のときに何故その有力な支持者となつたのか、逆に、ピューリタン革命のときの議会派の拠点であつた東部地方が、モンマスの叛乱には何故冷淡であつたのか、こういう問題がジュントリとかヨーマンとかという漠然とした用語によつてではなく、具体的に解明される必要があるであろう。

第三に、とくにモーリの研究には欠けているのであるが、国際関係が視野のなかにとりいれられる必要がある。後期ステュアート朝におけるあの目まぐるしい国際関係の変動——第二・第三次のオランダ戦争、ドーヴァーの密約、三国同盟、対フランス禁輸、そしてオランダ総督によるイギリスの「解放」——のなかで、チャールズやジェームズの政策と、それに対する抵抗運動が、とりあ<sup>(1)</sup>げられなければならない。

第四に、モンマスの叛乱とオレンジ公との関係については、マコーリの見解を克服しつつ、ほぼ一致した結論がでてきているようであるが、モンマス派内部の

---

(1) 当時の国際関係については、シーリーの前掲書やランケの古典的名著があるが最近においても、K. H. D. Haley ; William of Orange and the English Opposition, 1672—4 (Oxford, 1953, pp. 231) や、L. Pinkham ; William III and the respectable Revolution, The part played by William of Orange in the Revolution of 1688 (Harvard, 1954, pp. viii, 272) のような成果がある。

対立については、問題は残されているし、とくにモンマスとワイルドマンら共和派との関係や、エマーソンがちよつとふれている「クラブメン」<sup>(2)</sup>とよばれた農民軍との関係などについて、もつと詳しい検討がなされなければならないし、またひろく、70年代におけるロンドンを中心とした抵抗運動との関係も、とりあげられる必要がある。そしてこの点では、王政復古以後、名誉革命後の民衆蜂起にまでおよぶ抵抗運動が、一貫して跡づけられるべきであろう。

最後に、本稿ではふれえなかつたけれども、思想史の問題としては、後期ステュアート時代におけるピューリタニズムの衰微・合理主義思想の伸長のなかで、このモンマスの叛乱のイデオロギーはやはりピューリタンのたつたのではなかろうか、もしそうだとすればそれは何故か、ということがありあげられるべきであろうし、そしてそこにもピューリタニズムと市民社会の思想構造との関連への一つの分析視角があるように思われる。

---

(2) W. R. Emerson ; op. cit., p. 60.